

第8回 想う

舞鶴引揚記念館では所蔵する約16,000点の資料のうち、570点がユネスコ世界記憶遺産として登録されています。

その中でも、抑留中に手作りされたものとして、第6回に紹介しました「メモ帳」と今回紹介します「白樺日誌」があります。

この「白樺日誌」は、2年間シベリアに抑留され、その後無事に帰国された舞鶴市出身の瀬野修さんが抑留中に作りました。

抑留中は物事を記録するにも筆記道具はありません。そこで、紙の代わりに白樺の皮を薄く剥いだものを使い、空き缶を加工してペン先を作り、煙突の煤を水に溶かしてインクの代わりにして使用しました。

白樺の皮52枚のうち、36枚の表裏に抑留中の出来事や、家族や故郷日本への想いを約200首の和歌にしたためてあります。

帰国するまでのみならず、帰国時にもあった幾度の所持品検査をくぐり抜けた奇跡の資料です。

※ 瀬野修さんは旧制舞鶴中学校の教師でしたが、出征した択捉島で終戦を迎え、その後は抑留者としてソ連コムソモリスク近郊の収容所を転々とし、昭和22年に引揚船で舞鶴に上陸しました。



看病する者もあらず幽囚の身を
かこちつゝ死にし戦友はも
幽囚の身こそ悲しき遺言もあらず
異郷に逝く人多し

(解説) 昭和21年1月5日、私は栄養失調で入院を命じられた。同じ日に私と一緒に入院したのは軍医に付き添われて病院まで歩いて行った。高熱患者は食事が進まない。100グラムのパンさえ食べない者もある。私の知っている兵隊の中でも。間もなく死んでしまった。死体は解剖に付されて埋葬されるのであるが、毎朝今日は何人死んだと当時肺炎患者で死ぬ者がずいぶん多かった。

土筆ありよもぎ草ありおのがじし
採りし野草に夕餉楽しも

(解説) 路傍に珍しく土筆が群生している。無造作に採ってはポケットにねじ込んだ。よもぎ草もある。野菜不足を野草で補うのだ。

砂利列車轟き渡り又もとの静寂
に帰りぬ夜明け近しも

(解説) 連日作業に疲れた体を床に横たえると、深い眠りに入ってしまう。厠に夜中起きると夜汽車が通る音がひとしきり響き渡る。

寒き夕家族こぞりて母の手に
なれる甘酒飲みつ語らふ

(解説) 甘酒を加減よく造ることが得意であった母は、麴を手に入れて来てはたびたび家族を喜ばせようと手まめに甘酒を造ってくれた。寒い冬の夜はそれが又何よりもおいしかった。

凍傷の鼻揉む兵の頬顔かな

(解説) 戦友から注意される。(中略) 鼻に手を触れて見てなるほど凍傷にかかっているなどあわてる。早速雪で擦る。時間があまり経過していなければ気長に擦ることによって快復するが、手遅れの場合は、もう後の祭りである。

南の空ふし拝む朝夕の点呼一入
思ひ深かる

(解説) 朝夕の点呼の時に南の空遥か故国を思って挨拶するのが一入り思い深い。この厳寒を無事に越えた暁こそ、待望の故国に帰る日なのだ。そう固く信じている。